

終末期癌看護に携わる看護師の意識調査

5階北病棟

○藤澤 綾美 城田 麻美 深見 恵梨子
小島 尚文 岩佐 雅子 中村 広子

はじめに

当病棟は外科系5科の混合病棟であり、手術・検査目的で短期入院する患者が多い。しかし一方で悪性疾患により入退院を繰り返し、終末期を迎えている患者がいる。看取る患者も年間約50例と他病棟と比べても多い。このような状況で、終末期の患者に対してどれくらい看護が提供できているか意識調査をした。

用語の定義 終末期看護・・・終末期癌看護

終末期患者・・・終末期の癌患者

I 研究目的 当病棟の終末期看護への意識調査を行い、実態を明らかにする。

II 研究方法

1 研究期間：平成20年1月～7月

2 調査対象：5階北病棟看護師

1回目アンケート18名 2回目アンケート24名

3 調査方法：岩瀬らが作成した「終末期医療に携わる看護師の患者ケアに対する満足度尺度」を使用した。その後独自で作成した質問紙調査で自由記載とした。

III 結果

1. 1回目アンケートについて①「患者との関係」でよいコミュニケーションが持てた65%②「患者の苦痛」の全ての項目で、できていない人80%③「家族ケア」の患者の意思を十分に理解し代弁する人がいたと感じた人83%④「チーム医療」の全ての項目でできたと感じた人約80%⑤「専門職としての能力」で知識や技術が不十分と答えた人78%。

2. 2回目アンケートについて①受持ち経験が有る人79%②興味がある人88%③苦手意識が有る人92%で理由は、責任を感じる、精神的に未熟等④告知によるコミュニケーションに影響があった人92%で理由はどこまで話をすればいいかわからない等⑤良い看護が提供できていないと感じた人42%、両方

33%で理由は看護に自信がない等⑥1人で悩んでいるかでは、有ると答えた人も無いと答えた人も半々だった。有ると答えた人は先輩に相談した等があった。⑦よい看護を提供するための対策として勉強会やデスクカンファレンスを行う等の意見があった。

V 考察

患者とのコミュニケーションがとれていない理由として急性期患者の処置が優先されやすく、終末期患者と接する時間が作れないからではないか。また患者の苦痛が取り除けない理由として、患者が求めるものを表出するまでの関わりができず、また知識・技術が不足しており、看護に自信がないためと考える。苦手意識がある人は92%であるが、これは看護師としてや社会人としての経験が未熟なことも一要因ではないかと考える。患者とのコミュニケーションは、未告知の場合患者の不安や不信感が生じやすい。一方告知済みの場合、患者や家族と踏み込んだ話がしやすく、患者との信頼関係が築きやすい。このことから告知の有無でコミュニケーションに影響がある人が多かったと考える。また終末期患者により看護が出来なかったと考えている人が多く、さらに消極的な意見が多々あった。これは何かしなければという気持ちはあるが、知識・技術不足が要因となり行動を起こせない人が多いためと考える。また苦手意識を持っている人が多い反面、興味がある人が88%いた。このことから終末期患者と関わる機会が多いからこそ、今後は計画的な勉強会やデスクカンファレンス等で知識を深めていく必要がある。

VI 結論

1. 患者の精神的や身体的苦痛が取り除けていないと思っている看護師が多い。
2. 苦手意識をもっている看護師のほとんどが終末期看護に興味を持っている。

